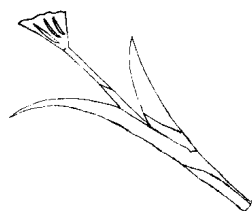


俘虜記・野火

大岡昇平



俘虜記・野火



大岡昇平

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進「編」日本の文学 78

俘虜記・野火

著 者 大岡昇平

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和五十九年八月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森蒔人

東京都新宿区新宿二丁目十九番十三

電話（〇三）三五四一七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二丁目十九番十三

電話（〇三）三五六一六二二一（代）

製 作 東京連合印刷株式会社

印刷 大日本法令印刷株式会社

目次

俘虜記

1

野火

91

注

若い人へ、あの愚劣を再び繰返さないために

中野孝次

391

381

俘
虜
記

わがこゝろのよくてころさぬにはあらず

歎たん異に抄しょう

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜ふりょうとなつた。

ミンドロ島はルソン島西南に位置するわが四国の半分ほどの大きさの島である。軍事施設として見るべきもなく、これを守るわが兵力は歩兵二ヶ中隊、海岸線に沿った六つの要地に名ばかりの警備駐屯を行うのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部及西部の警備を担当した。中隊本部は私を含む一ヶ小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小

隊はそれぞれ東南ブラカオ及び西北パルアンにあった。サンホセ、パルアン間、つまりこの島の全長を蔽^{おほ}う約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼等^{かれら}は攻撃しては来なかった。

昭和十九年十二月十五日米軍は艦船約六十隻をもってサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブラカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はまだこの地に上つていなかったが、彼等はサンホセの砲声を聞いて、いち早く糧食、無線機と共にこゝに退避していたのである。糧食はなお豊富であり、まもなく我々と合流した附近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ総員約二百名、なお三ヶ月以上を支え得る筈^{はず}であった。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散する迄^{まで}、我々は約四十日こゝに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては来なかつた。「奴等^{やつら}は怠け者だからこんなとこまでやって来やしないさ。そっちが来なけりゃこっちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだろう」と我々の当分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいつたが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍^{すなわ}がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にじつとして居れば^お、戦は我々の上を通過して、こゝは最後まで所謂「忘れられた戦線^{いわゆる}」として残る可能性があつたからである。我々の様な孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかった。我々はやがてルソン島バタングス所在の大隊本部から敵状偵察の命を受け、度々十数名より成る斥候^{せつこう}が組織され、十日或いは一週間サンホセ附近の山中に潜伏して

歸った。或る時彼等は米哨兵しやうへいに発見され射撃された。

まもなく一ヶ小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見たる状況を大隊本部に打電した。彼等は屢々しばしば数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操って魚を釣った湾内には、米機外艇が引掻ひっかくいた様に白い水脈を引いて縦横に疾駆しやくしていた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊きりこみたいの派遣を告げて来た。しかし彼等の到着予定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸して居り、彼等を乗せた舟艇は以来行方不明であった。もっともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我我の中から若干の決死隊を出して嚮導きやうどうとせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍に対する百五十名の斬込隊の成果について、

我々は何の幻想も持っていなかった。

しかし我々はその後も命令により幾度かブララカオに出張し、或いは到着しているかも知れぬ斬込隊を迎えに行った。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに來た不運な住民を拉致^{ちぢ}して歸った。こうして我々は不本意ながらだんだん掃蕩^{そうとう}される原因を作つて行つたのである。

こうした絶望的状况にあつても、我々兵士は比較的呑氣^{のんき}であつた。我々は

ことごとくその年初めて召集され、三ヶ月の教育の後直ちにこゝへ送られた補充兵であり、経験の欠除から事態の重大さがピンと來なかつたからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を毎日氣に病んでいられるものでもない以上、こうした無智^{むち}は我々にとつてむしろ一種天与の恩恵だったということも出來ようか。我々は大部分私の様な三十を越した中年の兵士であり、目前の事態から強いて早急な結論を求め

ようとはしなかった。

それにこの山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかった。気候は既に乾季に入って雨も少なく、暑いのは日中、それも日向^{ひなた}だけであるから、着のみ着のまゝの露營生活には丁度^{ちやうど}手頃な陽気である。糧食も差当って不自由なく、分隊^{ぶんたい}毎に疎開分宿したから軍紀もおのずから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも来た様な気持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の山地人（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い異人種で、戦争に無関心である）と馴^なれて、赤布、アルミ貨等を与えて芋、バナナ、煙草^{たばこ}等を獲た。我々は時々麓^{ふもと}に下り、飼主を失って彷徨^{ほうこう}する牛を射ってその肉を食べた。

しかし災厄^{さいやく}は意外な方からやって来た。マラリアである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの発生する島だそうである。しか

し予防薬をとっていたため、サンホセに在る間は患者は二三名を越えなかったが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したため、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立って戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月の間には大体一日三人ずつ死んで行つた。

病人は静かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その呑氣な日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充満している病人を眺め、黙つて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いていた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局こうして病人が増えて動きがとれなくなつたの

である。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を不落の安全地帯と見倣^{みな}す近視眼的前提が含まれていた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかゝる樂觀的予測を抱懷し得た筈はない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をなし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼^めその顔には現れていた。私は彼の体にその僚友の死臭を嗅^かぐ様にさえ思つた。

「警備隊は警備地区をもつてその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一遍の訓示を行つていたとは思わない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿^{ひとく}しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与え放ち帰らしめた。彼の言動には

常に一種の諦め^{あきら}があり、彼の動作はいわば過度に緩慢であって、時々齒の間から押し出す様に弱く笑った。犠牲者の笑いである。

彼は幾分進んで死を求めた様である。サンホセ駐屯中行った討伐戦において、彼は常に先頭に立って戦い、決して自分を遮蔽^{しゃへい}しなかった。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自らに課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはいられない、あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等は一般にたゞ自己の死によつてしか、その部下に対する要求を正常化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて最先に戦死した。恐らく本望だつたろう。

一種の共感から私はこの若い将校を秘^{ひそ}かに愛していた。私もまた私なりに彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自己の確実な死を見詰めて生

きていたからである。

私は既に日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦に引ずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかった以上、今更彼等によって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこうした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嗤わなかったためにも、そう考える必要があったのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具のような連絡船の赤や青の灯を見て、奴隷の様に死に向って積み出されて行く自分の惨めさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」という觀念に安住し、時局便乗の虚言者も、空しく談ずる敗戦主義者も一禁げに嗤っていたが、いざ輸

送船に乗ってしまうと、単なる「死」がどっかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はい、別れは実際辛^{つら}かったが、それは現に私が輸送船上にいるという事実によって、確かに過ぎ去った。未来には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全なる虚無であり、そこに移るのも、今私が否^{いや}応なく輸送船に乘せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思い患うことがあろう。私は繰り返しよう自分にいい聞かせた。しかし死の観念は絶えず戻って、生活のあらゆる瞬間に私を襲った。私は遂^{つい}にいかにも死とは何者でもない、たゞ確実な死を控^{ひか}えて今私が生きている、それが問題なのだということを了解した。

死の観念はしかし快い観念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子^{やし}と火焰樹^{かえんじゆ}は